

令和7年度熊本市エイズ総合対策推進会議議事録（要旨）

開催日時：令和7年（2025年）9月30日（火）14時～16時

開催場所：ウェルパルクまもと3階すこやかホール

出席委員：14名（敬称略、○は新任委員）

松下修三、○齊藤忠継、塚原みゆき、○島田美樹子、○松下昭子、○藤田真理子、片渕美和子、○竹下ちひろ、滝本恵子、濱部純子、○水上憲誠、泉秀明、○西山美香、こうぞう

欠席委員：6名（敬称略、○は新任委員）

伊藤隆史、秋月百合、江上公康、別當茉奈、○須本清仁、今坂洋志

代理出席

岡田久美華（今坂委員の代理）

次第

1 開会

2 熊本市保健所長挨拶

3 委員紹介

4 会長挨拶（松下会長）

5 講話「エイズの現状と課題」

熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター 抗ウイルス療法血液疾患研究共同研究講座、臨床レトロウイルス学分野 特任教授松下修三氏（会長）から「エイズ/HIV 感染症の基礎、発生動向、世界の最新情報」についてご講話いただいた。

6 議事

議事進行：松下会長

資料に沿って、事務局（感染症予防課）から説明

- (1) エイズ及び性感染症の発生動向
- (2) 令和5～9年度 HIV 感染及び性感染症の予防対策（計画）
- (3) 熊本市エイズ対策に関する令和6年度報告及び令和7年度計画

（質疑応答）

【片渕委員（熊本市青少年健全育成連絡協議会）】

資料5ページの性感染症の動向について、これまで、私たちが認識していたものと随分違うような気がする。やはりこのくらい男性が増えて、女性が少なくなっているというのが現実な

のか。コンジローマと淋菌に関しては男性が圧倒的に多いのは確かだと思う。これはおそらく変わらない。クラミジアとヘルペスに関しても、男性の方がずっと多くなっていて、私たちが普通見ているのと比べてちょっと違うので、定点報告ではやはりこんなふうになっているのかなと思った。全国の発表で見ても、クラミジアとヘルペスはやはり女性の方が多くて、男性の方が少ないというのが現状だけれども、この年は特別何かあるのか。

【事務局（感染症予防課）】

熊本市の定点医療機関は6施設あり、このうち4施設が泌尿器科で、2施設が産婦人科を標榜している病院になるため、もしかするとそれが影響しているのかもしれない。ただ、病院自体は毎年同じ病院をずっと継続しているので、年度によって病院が変わるということはない。

【片渕委員（熊本市青少年健全育成連絡協議会）】

ありがとうございます。だから、意識を変えなきゃいけないのかなと思った。定点報告だから少し偏ったものになるのかもしれないけれども。性感染症で、産婦人科に来る方達は大体パートナーが陽性だったから来院されるが、ご自分は何ともなく、そのパートナーとしかセックスしてない。今若い人たちはセックスを全くしない人の割合も増えてきていて、その子達が、こういう情報を耳にすると、もうセックスをしない方向に向かってしまう。そうすると私はしないから安全である、安全であるから関係ないことになってしまう。だから自分は安全であると思っている青少年が増えると、無関心に繋がるし、それと感染者に対する差別意識が強くなってくると思う。青少協の方ではいわゆる問題行動や不登校など、いろいろ問題を抱えた青少年に対する活動をしている。この間も理事会で、そういう子たちが何らかのきっかけで、いわゆる性の搾取をされるような性虐待を受ける立場になったりもする。その子達は性感染症に感染するリスクも高いし、その中に当然 HIV も含まれていて、おそらくその子たちは検査を受けることなく、結果として治療を受けることもなくずっと経過してしまうのだと思う。なのでそこが一番怖い。だから青少協としても、性感染症や HIV 感染の啓発は、継続しなきゃいけないと思っている。今は何ともなくもう忘れてしまっている。国を挙げて HIV に関する対策が始まった頃、それはもう村を挙げて町を挙げてやっていたけれども、それがもうほとんど薄れてしまっている。コロナも最初はすごい差別を持って、人が死ぬようなことだと言われていたけれども、今はどの飲み屋に行ってもみんなマスクもしていない状況になっている。HIV 感染に関しても、薄くなってしまっているのが非常に怖いところで、もう無関心。無関心だけれども自分は安全だと思っている人が増えているのが非常に怖いところだと感じている。やはり、パンフレットを渡して終わりではなく、やはり私たちはセックスをせざるをえないとか、無理やりされてしまった若い人たちにどう寄り添うか、そのあたりで、どう対策をとっていくのかが、とても大事なことでその立場でやっぱり考えて欲しいなと思う。これはもう、差別に繋がって

しまう。安全なところにいる、真面目で正しい学生にそれぞれ話をしても関係ないからと思って、誰も聞かない。

【松下会長（熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター）】

核心をつくコメントだと思う。だから、どういうふうに広報するのか、自分ごとでない人たちが増えてきているってことではないかと思う。高齢化といいますけども、新規患者は30代、40代の人が多くて、その方たちは20代ぐらいで感染している。性活動が活発なときに、自分のこととしてどう考えるかっていうことだと思う。だからこれをどこでどういうふうに、それをキャンペーンするかが1つの大きな課題。そういう方が行くところでやらないといけないうが、前はケイバーとかがあったけれども、今はそこに行かない方もたくさん増えてきていて、広報のあり方には1つ問題があるかと思う。

私から1つ、HIV及び性感染症郵送検査は非常に良い取り組みだと思う。熊本市の住民だけを対象として書いてあるが、どうやってこれを区別するのか。

【事務局（感染症予防課）】

申し込みをしていただくとき、検査キットを送付するために住所を入力してもらう必要があるため、そこで熊本市外の方は申し込みができないようなシステムになっている。

【松下会長（熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター）】

検査キットの受け取りは自宅と保健所が選択できるようになっているが、保健所で受け取る場合は、どうやって熊本市の住民を確認するのか。

【事務局（感染症予防課）】

保健所での受け取りの方は、免許証などの身分証で確認させていただく。

【松下会長（熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター）】

確認するのであれば、それは匿名ではない。

匿名性ということと、その住民であるということが全く独立してはいないと私は思う。だから、必ずこれは批判される箇所だと思う。

【事務局（感染症予防課）】

熊本市では、今年度から初めて郵送検査に取り組もうとしている。また、熊本県の健康危機管理課も、今年度から補正予算で対応されるということになっている。行政の管轄で、それぞれ分かれているところもあるが、ただ今年度の試行を踏まえて、来年度以降の実施にあたっては、

熊本県の健康危機管理課と協議していきたい。郵送検査を市と県の双方でやっているの、あえて熊本市民と限定せず、ご指摘いただいた課題として、県と連携しながら、匿名性が担保できるようなやり方を模索していきたいと思う。

【松下会長（熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター）】

ありがとうございます。本来は、分け隔てなくやるべきだと思う。以前、北海道で北海道在住者ではない人が断られたという案件があった。私たちは決して行政区で生きているわけじゃないので、そういう意味では、もう少しオープンでできるような方向にやっていただければと思う。これは古いシステムだと僕は思う。

【事務局（感染症予防課）】

今年度は、熊本県とスタートする時期などもばらばらで、調整ができていなかったが、利便性を考えると、ある程度やり方をあわせたりとか、行政区で分ける必要があるのかとか、そこはしっかり来年度に向けて熊本県と話していきたい。

【松下会長（熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター）】

ありがとうございます。研究によっては、保健所に検査に行く人と郵送検査でやる人と、それから、診療所検査に行く人が違うという結果がある。要するに自分が検査を受けたいところが違ってどういうわけだか保健所には行きたくない人もいます。ですから、そういう意味で多様性があることが必要で、それでもどうしてもやはり引っ込み思案な方もいるので、何か心理的な支援ができたらいいと思う。

【こうぞう委員（Safety Blanket）】

今の松下先生の匿名性に関連してのご質問ですが、何年も前から郵送検査が東京とかで行われていることを、自分も知っているが、実際に送られてきたキットを見たことがない。また以前も、東京だったり別の地域で、連携して行われた検査事業者なのかお尋ねしたい。

キットを自宅郵送した場合は、例えばH I Vの検査とか、何か保健所とか、そういった記載はあるのか。例えば家族と住んでいるけれども自分が同性愛者とばれたくない、カミングアウトしていない当事者の元に届く郵送物として、家族がこれは何だろうというような疑問を抱くような形では届かないものという認識で大丈夫か。検査キットの封書の内容などを見て、家族からこれは何だろうというようなトラブルに繋がらないかというところがちょっと気になったので、伺いたい。

【事務局（感染症予防課）】

検査キットは、透けないように黒いビニール袋で包まれ、定形外の普通郵便で送られてくる。封筒の方にも検査キット在中などの文言は入っていない。検査事業者に関しては、アルバコーポレーションという会社に委託をする。この会社は、厚生労働省の研究班と協働で郵送検査について研究事業をされている会社になるため、検査結果に関しても、個人情報に関しても、しっかりとしたシステムを作られているため、安心できる。

【こうぞう委員（Safety Blanket）】

ありがとうございます。今の内容だと大丈夫なのかなと思う。もしこの郵送検査が始まって熊本市のホームページやSNSで告知する際も、郵送される際はそういう配慮がされているということも明示していただいた方が、検査する人の心配も少なくなると思う。

【塚原委員（熊本市薬剤師会）】

13 ページのその他のところで、熊本市版のたんぽぽは、今まであるものとのどのような違いがあるのか。

【事務局（感染症予防課）】

東京都が作成されているたんぽぽでは、相談先や、HIV陽性と分かって障がい者手帳の手続きをする際の各区役所の窓口の案内が東京都になっているので、熊本市の窓口案内に書き換えたものとなる。

【塚原委員（熊本市薬剤師会）】

ありがとうございます。

【片淵委員（熊本市青少年健全育成連絡協議会）】

先ほどの匿名性ということも含めてなんですけども、私たちの家に郵便が来て、熊本市とか保健所とか書いてあるとそれだけでドキッとします。だから、その辺りは本当に配慮しないとけないと思う。それを避けるためにやはり違う住所、友達の住所、一人暮らしの人の住所を使うということもあるのかなと思う。感染者と認定された後の治療費については、障がい認定を受けることで全部公費負担になっていて、この手続きは地方自治体が担当している。なので、実際役場に行けない。知りあいがいる。小さい自治体であればあるほど、その方たちは故郷を捨てて、東京なり大阪なり行って、そこで治療を受けることになることをエイズ教育の中でかなり強調して話をした経験があるが、今はどうなのか、だから受けるべき治療を受けられない人が大分いるのではないかといまだに思っている。

【事務局（障がい福祉課）】

障がい福祉課です。基本的には障がい者手帳の手続きは区役所で行いますが、内容に応じて、別室を設けるとか、個室での対応をさせていただいている。

【松下会長（熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター）】

一応、守秘義務があって、全部秘密を守られている。

【片淵委員（熊本市青少年健全育成連絡協議会）】

守秘義務は、ほぼほぼ守られないのが世間なので、それをとても心配している。産婦人科の門をくぐっただけで、あの子は中絶しに行ったというのが世の中だから。役場に行ったらもう知り合いがいて、住民票を変えてしまうのではないかという、実際そういう方達が昔はいましたから、今はどうなのかなと思っただけで、守秘義務は守られないと思っている。絶対守ってくださいやはり守られないことには、治療も受けられない。

【松下会長（熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター）】

ベトナムでは全く守られないらしい。だから逆に言うとそれで、むしろみんな病院に行くことがちゃんとできているという話もある。やはり HIV に対して偏見差別があるからで、普通の病気になるればいい。HIV 検査を受けていることはもうむしろ、いいことだというふうに思われないといけない。なかなかそうはなっていないのが実態で、それを何とかしようというのがもう1つ、この皆さんの集まりの目的。やはり、相当の数の陽性の方がいるし、LGBTの方もたくさんいて普通に一緒に生活しているから、そういう方が検査するのも普通だと思っていと思う。

だから、知り合いがいてもそれは感染症も含めて多様性だと思わなければいけない。自分は大丈夫と思ひ、自分と差別して、大丈夫な方と危ない方というふうな差別になってしまうのが問題。誰だってそういう立場になるわけだから。自分が安全な立場にいるというような、教育でないようにしていただきたい。メインストリームからずれた人を差別するようなことがずっと起こっているというのは、歴史的な事実。変えなきゃいけないというか、変わっている。実際、子供たちの時代からも変わっていくと思う。ですから先生のご配慮は非常に重要な話。それでは、最後に委員の皆様からご意見や各団体での取り組みを一言ずつお願いします。

【齊藤委員（熊本市歯科医師会）】

HIV 感染症にしても、我々の歯科領域で言えば、皆さんご存じの歯周病なんかも、感染症である。我々が一番苦労するのは感染症になって、歯医者に行ったら治ると思われているのが、我々にとっては困る。そこが一番日本で歯周病が直らないと言われている1つの要因。直すのは、あなたですということをして一生懸命、各歯医者先生たちは患者さんにおっしゃっている。今日、HIVのお話を聞きながら、我々と考え方が似ているなど。よく我々が言っている、病

気と共存しませんか。歯周病になっても発症する前に、なくなれば、それは病気じゃなくてもいいでしょということの説明することもありますから。そういうふうなとらえ方で、我々もやっている。今日、ありがたい話を聞かせていただいた。

【松下会長（熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター）】

以前は評判が立ったりするのが一番怖いとか、職員の皆さん全員の理解が得られないという、2つの理由でなかなか見てもらえるところが少なかったが、大分見ていただけるようになった。実際見ても、標準予防策で大丈夫だから、普通に見ていただけている。特別なことは何もいらぬ。僕は今200名ほどの患者を診ているわけですけど、もう皆さん高齢化で歯医者にかからなきゃいけなくなっていて、地域の歯科の先生方に大分診てもらっていて非常に感謝している。前は本当に見てもらえなかった。ですからそういう意味で、歯科だけではなくて、今言いました高齢に関係したいろいろな病気を市中の病院で診てもらおうことになると思う。実際、一部の手術も、大学でなかなか診られないところもあって、市中の病院では、早くてうまい先生もいっぱいいて、普段から皆さんが行っている歯医者の中にも、HIV感染者の方も受診されて問題なく診療できている。

【塚原委員（熊本市薬剤師会）】

私は普段調剤薬局で働いているが、なかなか調剤薬局でエイズの患者さんに投薬することはない。治療薬や予防薬に関しても、触れることがないので、知識として私もかなり低い。去年からこの会議に参加させてもらい、いろいろ学ばせてもらった。去年、熊本大学病院の高林先生とお話させてもらって、去年からPrEPも承認されて、今後私たちが触れることも増えていくのかなとは思いますが、多分、エイズのことについて、あまり知識のない薬剤師が実際のところ多いと思う。実際思っている。薬剤師会では、毎月研修会も行っているのだから、また松下先生にご講演いただけたらなと思う。どうぞよろしく願いいたします。

【島田委員（熊本県看護協会）】

看護協会では、助産師職の取り組みとして、小学校中学校高校へ出前授業というのをやっている。心と体の変化と成長、多様な生き方、性感染症や人工妊娠中絶など自身の大切な体を守るということについて伝えている。やはり、LGBTQやエイズ、多様な生き方については、職場の中でも研修会等を実施する必要があると感じている。ただ、私も今日話を聞いていて、いろいろ変わっているのだと非常に学びになった。研修が必要なときには先生にお願いすることがあるかと思しますのでどうぞよろしく願いいたします。

【松下委員（熊本県公立高等学校PTA連合会）】

エイズが話題になったとき、私は学生でしたのですごく衝撃を受けたのを覚えている。そこから40年立って、こんなに中身が変わってきているんだなっていう。今回、この会議に出席させていただいて、自分の中で追いついてない部分がすごくあって、それはなぜかっていうと、やはりマスメディアからの情報がほぼほぼ一般には回ってない。専門的なところや病院関係など、そういうところには情報が入っているかもしれないが、一般人には回っていない、ていうのが、今回ひしひしと感じた。PTAとして、チラシやリーフレットとかを、高校を卒業する子たちに配布してほしい。もし、不安なことや、何か症状がでていたら、ここに相談すればいいよ、こういう方法があるよっていうのを、発信していただきたい。

【竹下委員（熊本県高等学校保健会）】

高校では、高校1年生の後期ぐらいエイズや性感染症について保健の授業で勉強する。また、多くの学校で年に1回ぐらい、助産師さんや臨床の先生方をお招きして性教育の講演会を実施している。同じ学校でも、生徒の実態は全然違うので、実態や知識、状況に応じて、保健室で個別の指導を行っている。今日は、たくさんの新しい情報や、市の新しい取り組みなども知ることができましたので、他校にもこの情報を流して、各校での取り組みや、生徒の対応に活用していきたい。また、松下会長（熊本県公立高等学校PTA連合会）の言われた通り、なかなか保護者の方に学校の取り組みを伝えられてなかったなということが分かりましたので、今後の課題として対応していきたい。

【滝本委員（熊本人権擁護委員協議会）】

昨年からの会に参加させていただいて、一般の人のエイズに対する認識の低さを感じ、マスコミの方でやはりどんどん取り上げていただいたら、もうちょっと身近に感じるのかなと思う。熊本人権擁護委員協議会の方では、ハンセン病のことに限ってはすごく今、皆さん勉強したり啓発したりしているが、やはりエイズも差別の方に繋がっているのかなっていうのが分かったので、協議会で今日の報告をして、皆さんに周知していきたい。

【濱部委員（熊本市民生委員児童委員協議会）】

熊本市の民生児童委員協議会での理事会で、必ず今日あったことは報告をしている。私が今日感じたことは、人が幸せに生きていくということは、本当にみんな望んでいることだと思う。先生のご講義の中で、20代の方が感染され、今や2030年では、もう高齢化が見えてくる。そうすると、孤独孤立という問題が発生してくる。そういう時に民生児童委員協議会では、やはり、どういうふうな寄り添い方をするのか。そしてまた、信頼関係を構築していくためには、どのような言葉かけや寄り添い方、それから民児委員になった人達がどういう心構えでいくか。余りにも、エイズに対して、勉強不足といいますか、わからない点がたくさんある。そういうことをやはりしっかり、自分で学びながら、その方たちに寄り添いながら歩いていくとい

うことが、とても大事になってくると思う。高齢化率はもう見えていて、熊本市の市長様も、孤立孤独をなくすということを全面的に上げている。今日の熊本市のご発表の中にも、本当にありがたいことがたくさん記載されていて、とても学びになった。でも、やはり先ほど青少協の方がおっしゃったように、守秘義務っていいですか、名前をどうしても言わないといけない。言いたくない。分かってしまうというような事例もあるのかなど。そういうことを、民生児童委員協議会の中でも、寄り添いながら信頼を作りながら、こういうふうにしてご相談されたらいいですか、というようなあり方というの、私たちの課題だと思っている。そういうことで、今日は大変学び多く勉強させていただきましたことに感謝申し上げたい。ありがとうございました。

【水上委員（熊本商工会議所）】

私も今回初めて参加させていただいて、非常に貴重なご意見、ご発表等で、勉強になった。商工会議所では、普段中小企業や小規模企業の方の支援を中心に行っている。我々に期待されているところという、やはり広報面だと思いますので、ホームページや毎月発行している会報誌があるので、こういったところでも今日いただいた情報を広く周知できるかなと思っていますので、ご依頼等がありましたら、ぜひご協力させていただきたいと思う。

【泉委員（連合熊本地域協議会）】

これまでのように組合員の方に、引き続き周知を行っていきたいと思う。今年度初めて、メーデーの方にブースを出していただき、よかったか悪かったかわかりませんが、可能であれば、今後も継続して開催できればなというふうに思っている。

【西山委員（熊本日新聞社）】

感染症情報に関しては読者の方の関心が高いテーマだと日々感じている。熊本県から毎週木曜日に感染症情報というのが発表されていて、私たちはそれを見て毎週記事を書き、翌日の朝刊で掲載している。と言っても、インフルエンザが流行期に入ったとか、コロナが増えてまいすとか、リンゴ病の流行とか、マダニの感染症が県内でちょっと今年が多いですとかそういった比較的一般的なのとか身近な感染症が多くて、性感染症に関しては、全数報告が必要な梅毒は報告があれば書いているが、エイズに関してはやはり情報が少ないな、と感じた。今日参加された方々が、様々な団体、組織からいらっしゃっていて、やはり幅広くとらえて、決して他人事ではなく、自分ごととして、感じるごと、啓発がとても大事だということを改めて感じた。

【こうぞう委員（Safety Blanket）】

先ほどの会議の中でも出てきましたが、トランプ政権になってから、エイズ関連の予算の大規模な削減が行われている。予算だけではなく、報道などでも、どちらかというところ、多様性を否定するような発言が非常に強いメッセージとして発信されていて、自分もLGBT関連の講話を熊本県内で何年間か行ってきたが、最近去年と比べて、比較的そういった講話とかに関心を持っていただく学校や企業の数には明らかに減っていると感じている。自分は別に専業で講師をしているわけではないのであまり気に留めてなかったが、他にも熊本県内で講演などを行っている人たちと話してみると、確かに1年前よりも減ってきているなということ、決してこの多様性に対する反発の動きというのは日本でも無関係ではないのかなというふうに思っている。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、僕は同性婚法制化を求める訴訟の原告としても立っている。昨日、お名前はもちろん出さないが、総裁選の候補者の方の1人が同性婚には反対だと、ただ、同性パートナーはいいと思うというような発言を中高生から受けた質問に対して回答されている報道があった。こういうふうに考えていただきたいんですけども、異性のパートナーがいいと思うというような言い方っていうのは、皆さんされないんじゃないかなと思う。肯定的なメッセージのつもりで発言されたかもしれませんが、その中にやっぱり無自覚な偏見や否定のメッセージがあって、同性パートナーはいいと思う、でもあなたたちには結婚を認めない。というような、私たちはあなたたちとは違うというメッセージを発信されているなというふうに感じた。そういった多様性の反動だったり、区別と言われると思うんですけども、偏見や差別というのは、今、ずっと積み上げてきたこのHIVの検査だったり、検査の敷居を下げる取り組みだったり、そういった積み上げてきたものをあっという間に崩してしまったり、昔のエイズパニックのころに逆戻りしかねないような危険性もすごいはらんでいるなと思っている。どうかエイズをその1つの病気としてだけでなく、やはり非常に強いスティグマをはらんでいるという背景を忘れずにいろんな視点から、取り組みを皆様に協力いただければありがたいなと思っているので、どうかよろしくお願ひします。

【岡田委員（ともに拓くLGBTQ+の会くまもと）】

代表の代わりに来ました岡田です。よろしくお願ひします。この話で、幼少のときの話を思い出した。35年前の話で、とあるボーカルの方が亡くなられた。その方はクイーン・フレディ・マーキュリーさんで、1991年にその方が、同性愛者でエイズに感染して亡くなったというのを幼少のときに知った。小学生に入ったときは、周りからホモはエイズにかかりやすいとか言われたりして、エイズにかかったら一生治らないとか、死ぬとか言われた話が広がっていた時期だった。それから1996年の話になるんですけど、このとき小学4年生で、道徳の授業で見せられた映画が、前年に公開された、アメリカの「マイフレンドフォーエバー」という映画だった。この「マイフレンドフォーエバー」という映画は、外国のゲイの友達の話で、それで先生たちが、決して男同士でも、エイズにはかからないし、かかったとしても死なないっていうのを、30年以上前なんですけど、先生たちが話してくれたのを思い出した。1996年てまさにこ

の年だったんだなと思った。こうやって大人になっても、先生たちの話はちゃんと頭に残っているんだなと思った。いろんな人たちがいると思うので、検索で「ともに拓くLGBTQプラスの会くまもと」を検索してもらえれば光栄です。ありがとうございます。

【事務局（感染症予防課）】

本日は長時間にわたりましていろいろ皆さんから多様な意見いただきましてありがとうございました。やはり皆様からいただいた意見の中で、特にやはり広報、周知啓発は非常にしっかり取り組んでいく必要があるかなというふうに思う。松下会長がおっしゃられたように、私も昨年度、感染症予防課長になりまして、そのときに「U=U」という言葉に非常に衝撃を受けて、本当に知識のアップデートをしていかなきゃいけないと思った。ただやっぱりアンケートの中でも「U=U」をご存じの方が、実際検査に来られた方の中でも20%程度しかご存じないということもあるので、しっかり周知広報に取り組んでいきたいと思う。またご意見いただく中で、学校教育現場に対しても、いろいろ取り組んでいく必要がある。またもう1つのテーマとしては12月に日本エイズ学会が開催されますけどその中のテーマとして、「HIVの検査再考」というのもありますので、多様な検査機会の確保に取り組んでいきたい。今回の郵送検査についても匿名性に関しては、改善できるように取り組んでいきたいと思いますが、担当職員もずっと頑張っていて、いろいろ考えてきたところもありますので、そういった担当職員の頑張りもありますので、多様な検査機会をさらに確保していきたいと思う。昨年度この対策会議の中で、いろんな動画を活用した周知啓発等もご意見いただいておりますので、徐々にではありますけど、郵送検査の動画の方とか、そういったものも、担当職員が頑張っていて作っているので、皆さんのご意見を踏まえて、広報と多様な検査機会の確保、そこにしっかり取り組んでいきたいと思う。本日はどうもありがとうございました。